

青春の「意識の流れ」を詩作化した人

星野明彦詩集

『いのちのにつき——愛と青春を見つめて』に寄せて

鈴木比佐雄

人はなぜ詩を書き始めるのか。そのような問いに簡単に答えることは難しい。しかし星野明彦さんの詩を読み始めると、一人の若者がなぜ詩を求め書き始めるのかが自ずと分かってくる。その意味でこの詩集には、詩に取り憑かれる若者の精神と身体を生体解剖をリアルに目撃するような驚きを感じる。星野さんはあとがきによると、この五一五篇にもなる長篇連詩を二十二歳から一年半ほどで書き上げたという。そして不思議なことにその後は、きつぱりと詩作を止めて、大学の教員になり、英文学の研究や英語教育に専念してきたという。星野さんは二十代前半で詩人としてなす

べきことをすべて成し遂げてしまった、という確信があったのだろう。この長篇連詩は書き上げた当時、高名な詩人の紹介で、ある出版社に持ち込まれた。編集者はこの長篇詩を抜粋し短くして、若い女性向けに編集しなせば、刊行してもいいと提案したらしい。星野さんはその提案を拒否して席を立ったという。たぶん星野さんにとってこの五一五篇の一万行を越える一年半の「意識の流れ」を書き留めたことが決定的な詩作行爲だったのだろう。それゆえにこの『いのちのにつき』の編集に関して、単語の間違いなどの他、ほとんど修正なしで収録することを星野さんは決意した。編集者である私も星野さんの青春の「意識の流れ」を尊重することによって、この処女詩集でありながら唯一の詩集になるかも知れない長編詩集を四十年後の今、出そうと考えた。星野さんの若かりし詩作実験をそのまま再現することが本詩集

の目的でもあったからだ。

この詩集の特長は、当時の若者の心の移ろいを赤裸々に語り、詩行と詩的精神の乖離がないということだ。詩作の原点である孤独な魂との自問から始まり、その自問の主旋律が、いつしか自然との交感をベースにしなが、母の死と、愛する人との対話に転化していく。その最も純粹な青年期にしか聞くことの出来ない主調音が二重奏、三重奏、四重奏になり、いつしか魂の旋律となり、人生の本質を予感し透視してしまう交響曲として、読むものの心に響き渡るのだ。

星野さんのこの連詩はどのような詩的源泉によって、影響され生み出されたのだろうか。詩篇の中に出てくる宮澤賢治と八木重吉などの夭折した詩人たちが星野さんに影響を与えていることは確かだろう。星野さんの純粹な魂は、賢治と重吉に激しく共鳴していたのだろう。賢治は、眺

められた自然の光景すべてに自らの心情を重ねて「心象スケッチ」することが出来た。重吉もまた散策する雑木林の光と風と心が琴の音のように感応していた。そんな二人の詩人の詩的精神が二十一、二歳の星野さんの内面に降りてきたのだろう。と同時に星野さんは、高校生時代からイギリスの詩や小説を原書で読んでいたという。星野さんは学生時代に海水浴をした後に、木陰の下や図書館の片隅で英語の原書の世界に入り込んでいった。特に心惹かれていたのが、ワーズワースやマザーグースだったそうだ。ワーズワースの自伝的長詩『序曲』などの若者の心を描いた詩篇が星野さんの心身に流れ込んでいった。またイギリスの民衆が語り継いできたフォークロアの童謡詩のリズム感と深い知恵から多くのものを学んだのだろう。その意味で星野さんは日本とイギリスの詩人たちの最も良質な詩的精神を自らのものに

していった。そんな遍歴の果てにこの五一五篇の連詩が二年足らずの内に書かれることが可能になった。

『いのちのにつき』の本体は五一五篇の短詩である。「いのちのにつき」七章から成り立っており、その後「補遺 いのちのにつき以前」の二十四篇が置かれている。星野さんにとってその当時最も大切なことは、五一五篇を書くことによって自らの内部の「いのち」とは何かを見出すことであつたのだろう。またこの世界で生きる意味を見出す精神の働きを確認する試みであつたに相違ない。一人の若者が世界に出て行く直前に感じる様々なためらいや不安や格闘など、さらに意識の表層さえもが赤裸々に記されているのだ。

「いのちのにつき」(一)——夕焼けに魅せられて」の冒頭は次のように始まっている。

1
夕暮れの海を
ひとり
ひとりで
しずかに
あゆむ

ふと
目の前を
照りつける
赤いものに向かつて
思いつき駆けてみる

ああ
いつまでも
砂は尽きない
走ろうと走ろうと
そのあたたかいものの中に

わたしは
入ってゆけない

この冒頭の三連の静から動に飛躍していくリズムや場面の展開に、若き星野さんの詩的精神の在りかが見えてくる。一連目の「夕暮れの海を／ひとりで／しずかに／あゆむ」は、世俗の欲望を捨て八木重吉が散策しながら、この世にあることに感謝を捧げているような敬虔な気持ちにさせてくれる。二連目の「ふと／目の前を／照りつける／

人類の民主主義の理想社会の二重性を詩の中で抱え込んだように、日本が戦後社会で高度成長に向う一九六〇年代後半に青春を送った若者の無限の理想と現実への違和感が表現されていると感ぜられる。また三人の詩人たちの聖なるものや無限なるものへの激しい憧れが、この冒頭の詩篇の根底に流れている。映像的でありながらも純粹な主調音が根底に流れて、感受性の鋭い若者の表層の心と有限な人間存在の悲しみの深層が交じり合つて、これらの詩篇は生まれたのだろう。

赤いものに向かつて／思いつき駆けてみる」は、宮沢賢治が自然と交感しそれと一体化してしまうような衝動や高貴な行動力を感じさせてくれる。また三連目の「ああ／いつまでも／砂は尽きない／走ろうと走ろうと／そのあたたかいものの中に／わたしは入ってゆけない」は、ワーズワースがイギリスの自然観とフランス革命などで勝ち得た

『いのちのにつき』(一)——夕暮れに魅せられて 1—79」は、青年が外界の景色をこの世で始めてみるような新鮮な気持ちで眺めていることが記されている。その外界の美しさを発見した思いが、「意識の流れ」となつて次々と詩篇が生まれていく。そしていつしか精神が純粹さに昇華されていくような思いを読むものに感じさせてく

れる。「(二)——生きる意味に魅せられて 80
—145」朝焼け夕焼けを眺めて、その色彩の移
りゆく美しさに驚き、また女性の美しさにもとき
めき、さらにこの世にはそのような美しさを生み
だした神が存在するのではないかと、その神と対
話したいと願うのだ。また、病に倒れた友人を思
いやる友情もはかなく美しい。「(三)——母の死
に遭って 146—218」は、母の闘病と死を
通して人間存在の儚さを実感するが、「母の生」
を次のように記している。「わが母は／ひっそり
と／まるで梅の花の／匂いを浮かせる／ようにし
て／世を去った／ひとりの女の／死としては／
立派だった／あれほどの人に／惜しまれ／その人
格の円満と／全てにわたる公平と／自らの死さえ
も／用意した／思慮の深さを偲ばれる人であった
／世のため／他人のため／貧しき者のために／尽
くしてやまなかった／母！／その母も／今は別世

界の／住人^{ひと}となった／われの内に／母の生くる
ぞ／よく生きよわれ」(147より)。このように
星野さんは「母の生」を自らに宿して生き続けよ
うと決意したのだと思われる。「(四)——友は病
臥して 219—268」では、才能ある男友達
が病に臥せっている姿に、思い通りにならない人
生の意味を深く思索していくようになる。「(五)
——エスさまわたしを導いて 269—342」
一人の人間として、一人の男として自分は何者
であるかという問いを発し、イエスとの対話を
試みる。幾人かの女性に出会い、愛を深めるこ
となく別れていく。詩人は真心の大切さを自覚
する。「(六)——愛の悦びに震えて 343—
409」一人の女性に出会い、愛を覚えるようにな
る。その思いが相手にも受け入れられ、悦び
に震える時を過ごす。また、過剰な情熱によっ
て、女性を理想化し始める危うさが記されてい

る。「(七)——突然の破局を迎えて 410—
515」は、母への愛を重ねて過剰な愛を求めた
男から女性が残酷に離れていき、男の言葉は空虚
に響いていく。初恋が壊れていくような痛みで二
人の関係が終わる。

星野さんは青春期の男女の愛が終わることが、
自立した一人の人間として新しい場所に立つ重要
な契機になることを物語っているのだろう。「い
のちのにつき」とは、愛が損なわれた喪失感のた
だ中に、真の愛を見出す可能性を最後に告げても
いるのだろうし、そのことを詩作化することが可
能であることを実証しようとした試みだったろう。
愚直に生きるべきか死ぬべきかを激しく問う青春
時代の「意識の流れ」を記したこの詩集が、現在^{いま}
の若者や年を経ても「いのち」を見詰める人びと
に広く読まれることを願っている。

星野明彦詩集 『いのちのちのにつき』 栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2011